

津軽半島北部の津軽海峡であった。

に面した今別町は、太宰が小説『津軽』の中で「明るく、近代的とさへ言ひたいくらゐの港町」と評しているように、江戸時代には弘前藩から九浦の一つに指定され町奉行が置かれた町場

であった。8月になると、太宰の今別を形容した修飾語をそのまま借りるなら「潇洒たる海港の明るい雰囲気」のねぶたが行われる。青森、弘前、五所川原以外にも津軽や下北地方には、その土地



今別町大川平地区の荒馬とねぶた
(平成20年8月7日)

なりのねぶた行事を伝えていた地区が多い。その共通点は、かつて城下町や港町など町場として栄えたという歴史にあるようである。今別町もその一つで、現在、8月4日から7日にかけて「荒馬まつり」と称して、ねぶたの運行を中心とした行事が行われている。昨年は、今別本町、八幡町、村元、大川平(おおかわだ

今別町の荒馬まつり

清野 耕司

(県民生活文化課)

県史編さんグループ 主幹

い)の4地区のねぶた運行があり、4日は合同運行であった。その特徴は、何と

である。

走り回るといふもの

い)の4地区のねぶた運行があり、4日は合同運行であった。その特徴は、何といても荒馬(地元ではアラマと発音する)という郷土芸能がねぶたの行列に付随している点で、ねぶたと荒馬との主客は判然とせず、名称からしても荒馬が際だっているという印象が強い。そもそも、津軽地方で荒馬といえば、田植え後のサ

それに比べて、今別町の荒馬は、若者の荒馬とその手綱を取る早乙女役の娘が組となり、笛と太鼓に合せて踊り、荒馬は次第に本性を現して暴れ出し、娘が手綱を放すとますます荒れ狂うというストーリーが特徴で、虫送りの荒馬が芸能として洗練され、スタイルや所作、囃子などが完成さ

ナブリ休みに行われる虫送りの行列の先導役であり、人の屋敷地や水田、畑地など、どこでも無礼講で荒らし回り、暴れるほど害虫を追い出し、災厄を払うとされているものである。この農村部の荒馬のスタイルは、青年団の若者がボドと呼ばれるぼろ着物を着て、顔を黒く塗り、トコマンボ(円形に編んだものを二つ折りにした形状のいわゆる鳥追い笠)をかぶり、馬の体に見立てた二股の木の枝を腰にあてがい、それをズルズル引きずって走り回るといふもの

れたものとも考えられる。その後関係は定かでないが、今別の伝承でも本来サナブリの行事とされることなどから、農村部の虫送りの素朴な荒馬から、港町今別の勇壮華麗な荒馬へと発展した可能性は否定できない。かつての虫送りは、こ今別においては消滅し、荒馬だけがねぶたと融合して進化したともいえるが、その経緯は解明されていない。

住民の高齢化、過疎化が著しい今別町では、本来若者を担い手とする荒馬に転機が訪れている。昭和の末ころから荒馬に関心を抱いた首都圏など県外の芸能研究者、教員、大学生などの存在が端緒となり、現在、荒馬や手綱取りの構成員の多数は県外の若者であり、それを地元のお年寄りや帰省した若者が見学するという逆転現象が起こっている。もちろん、指導的役割を果たすのは地元の保存会のメンバーであり、地区の小学生や数少ない若者も先頭に立ってがんばっている。